

福 井 県 医 師 会

だより

第722号 令和3年(2021)8月

福井県医学会総会 第100回記念大会特集



池端県医会長と令和3年度会員表彰式被表彰者



## 会 長 就 任 挨 拶

福井県医師会長 池 端 幸 彦

さる令和3年6月20日第254回福井県医師会定例代議員会において、2期目の福井県医師会会長にご選任頂きましたこと、まずもって心より御礼申し上げます。振り返りますと、令和元年6月、福井県医師会長に初めてご選任頂いて以来、「県民そして会員のための県医師会へのチェンジ」を基本方針とし、5つの活動の柱を掲げ、安川繁博・腰地孝昭両副会長を始め、素晴らしい理事・監事の先生方とともに会務に邁進してまいりました。

しかしながらご承知の通り、令和元年12月中国湖北省武漢市から始まったCOVID-19は瞬く間に世界中に拡散し、県内においても、令和2年3月18日の第1例発生後、一時は医療崩壊も危惧される状況にまで至りました。私自身、よもや会長職就任1年目にして、このようなパンデミックの陣頭指揮を迫られる事になることは夢にも思いませんでしたが、これも天命と覚悟を決め、とにかくその場その場で今自分に出ることを精一杯頑張ってきたつもりです。

結果として、国内の多くの地域で未だに感染収束には程遠い状況の中、県内においては、杉本達治知事の陣頭指揮のもと、県民の深いご理解と共に、会員そして会員医療機関の皆様方の絶大なるご協力ご支援もあり、COVID-19に対する外来・入院診療、PCR検査、更にはワクチン接種等の体制が比較的順調に整備されてきました。またこの間、多くの県民からの「心をひとつに ふくい応援」基金を始め、福井県医師信用組合や福井県医師協同組合、更には各関連企業様や団体様からも多くのご厚志、ご支援、応援メッセージ等を頂きましたことも含めて、この場をお借りして深く感謝申し上げたいと思

います。

本来ならば、ここで「そのお陰もあって、最近の県内の感染状況は比較的落ち着きを取り戻しつつあり…」と続けたいところではありましたが、残念ながら本年6月中旬から再び県内飲食店を中心としたメガクラスターによる感染者急増で、まだまだ県内も予断を許さない状況にあることを思い知らされております。

いずれにしましても、残念ながら私の1期目任期の大半はコロナに明けコロナに暮れる感がありましたが、一方で医療界においては、後期高齢者の窓口2割負担、大病院の外来定額負担、健康保険証のオンライン資格認証制度の本格導入、待ったなしの医師の働き方改革、5疾病5事業に新たに加えられた「新興・再興感染症」への医療提供体制を含めた新たな地域医療構想の体制づくり、更にははいよいよこの7月から本格的議論が開始されようとしている令和4年度診療報酬改定等々、今後も非常に重要な課題が目白押しであります。

幸い現在私は、これらの議論の場の中心でもある中央社会保険医療協議会（中医協）と社会保障審議会医療保険部会の委員も拝命しておりますので、地方で地域医療を担う福井県医師会員の代表としても、しっかりとこの議論に参加していきたいと思っております。

私にとって2期目となる役員体制では、定款の一部改正により3名体制となりました副会長には、ご留任頂きました安川繁博先生に加えて、ながらく県医師会総務理事を務めて頂きました広瀬真紀先生、また前任の腰地孝昭先生と同じく、現福井大学医学部附属病院の病院長で福井

大学医師会長の嶋勇成先生をご選任頂きました。更には理事の増員に伴い、念願だった2名の女性理事もご選任頂いたほか、各郡市区医師会からは再任・新任を含めて大変有能な理事・監事の先生方をご選任頂きましたこと、大変心強く感じており深く感謝申し上げます。

ところで、近代日本資本主義の父と言われた渋沢栄一氏は、令和6年に刷新される新1万円札の顔、そして現在放映中のNHK大河ドラマ「青天を衝け」の主人公として、今や「時の人」であり、先生方もよくご存知かと思えます。その渋沢氏は、代表的著作でもある『論語と算盤』の中で、「逆境の時こそ、力を尽くす」という言葉を遺しています。更に逆境とは「大丈夫の試金石」、つまり「人がその真価を試される機会」であり、また逆境には2種類あり、1つは地震や水害といった「自然的逆境」で、これは人の力で全てを克服することはできず、したがって「足るを知る」「分を守る」という心がけが肝心であり、やるべきことをやったならば、あとは心静かに天命にゆだねることだといえます。しかしもう1つは人がつくる「人為的逆境」であり、これを誰かのせいにするのではなく、自分がやったことの結果だと受け止め、人為的な逆境に対しては、自らが志を立て自分が成し遂げたいと思うことに奮励すべきであり、そうすれば「大概はその意のごとくになるものである」と説いています。（『論語と算盤』渋沢栄一原作より）

私達が今直面しているコロナ禍は正に「自然的逆境」であり、「人事を尽くして天命を待つ」しかないのかも知れませんが、その対策の過程で、「発熱患者、ましてやコロナ患者の受入なんて無理！」「これ以上、ワクチン接種を増やせなんて無理！」などと、私達はどうしても「できるか、できないか」という軸で考えがちです。一方、渋沢氏は「やりたいか、やりたくないか」

という軸。本当は「やりたい」ことなのに「できない」と思っていること、これも「人為的逆境」と言えるかもしれません。

私自身まだまだ力不足の感は否めませんが、「逆境の時こそ、力を尽くす」との渋沢氏の精神を肝に銘じ、志半ばであった1期目の基本方針と5つの活動指針は、下記の通り ver. 2としてほぼそのまま踏襲させて頂き、「やりたい」けど「できない」ことを少しでも克服すべく、会員の皆様のお力をお借りしながら、県民のためそしてもちろん会員のために、全身全霊、県医師会活動に取り組んで参りたいと思います。

最後になりましたが、近い将来、明るい“New Normal”時代が必ずやってくる事を信じつつ、会員各位のご健勝ご多幸をご祈念申し上げますとともに、今後ともご指導ご鞭撻の程お願い申し上げます。県医師会会長就任のご挨拶と決意表明とさせていただきます。

### 【キャッチフレーズ】

**Act Now for the New Normal**

～ニューノーマルのための今～

### 【基本方針】

県民のための県医師会へのチェンジ

### 【5つの活動指針】 ver.2

1. 組織の効率化・活性化
2. 郡市区医師会との連携強化
3. 県及び県内医療関連団体・組織等との連携強化
4. 災害対策本部の機能強化
5. 広報活動・医政活動の充実



## 副会長就任挨拶

福井県医師会副会長 安川 繁博

去る6月20日の第254回福井県医師会定例代議員会におきまして、本会副会長に再任いただきましたこと、心より御礼申し上げます。

1期目の2年間の大部分は、新型コロナウイルス感染症対策に追われることになりましたが、池端会長とともに行政や多くの病院の先生方との話し合いを繰り返すことで、福井県としてのしっかりした新型コロナウイルス感染症の診療体制を構築することが出来ました。たいへん貴重な経験をさせていただいたと思っております。国内外をみても新型コロナウイルス感染症は新たな変異株による感染の波が繰り返し押し寄せてきており、収束への出口は未だ見えない状況にあります。現在すすめられているワクチン接種の効果に期待していますが、安心して動けるようになるにはまだまだ時間を要するものと考えられます。引き続き感染動向を注視し、新型コロナウイルス感染症対策を油断することなく継続していくことが2期目の大きな仕事であると考えております。現在新型コロナウイルス感染症の診療や予防接種などに対して、国は大盤振る舞いで補助金や支援金を出していますが、収束したあとの医療体制や診療報酬にも注意していかなければと思います。

またコロナ禍の中でも待ったなしで進められている医師の働き方改革への対応も重要と考えます。医師会が動いて内容が変わるというのではなく、既に対応に動いている病院も多いと思いますが、適切な情報を速やかに発信していければと考えています。

さらに新型コロナウイルス感染症の影響で一旦止まっているかにみえる地域医療構想調整会議も再び動き出すものと思われれます。福井県で

も問題になっている医師の偏在対策や、このところ挙がってきている外来診療の機能分化の問題なども会議の中で話し合われることになると考えています。簡単に解決案が出る問題ではありませんが、しっかり考えて参ります。

また1期目の就任挨拶で書きました災害への対応も大事な課題です。日本医師会のJMAT研修会に参加させていただきましたが、新型コロナウイルス感染症の急速な拡大のために県内で実践的な訓練や講習会を開催することはほとんど出来ませんでした。新型コロナウイルス感染症そのものがある意味大きな災害と言えますが、今期は福井県の災害医療体制の構築に改めて取り組んでいきたいと考えております。

池端会長の2期目は新たな体制でのスタートとなります。同じく副会長として広瀬真紀先生と新たに福井大学の病院長になられた大嶋勇成先生という実力あるお二人の先生が就任され、今期より副会長3名体制となりました。昨年、池端会長は中医協の委員となられ益々忙しく仕事をされておられますので、しっかり補佐していきたいと考えております。また岡崎真紀先生、畑郁江先生のお二人が新たに理事となられ、本会として初めて複数の女性理事が誕生しました。お二人のご活躍に期待しております。

1期目の挨拶文を書いている時点では新型コロナウイルス感染症のことなど全く頭の中にありませんでした。再び予測できない問題が起こる可能性もありますが、まずは今やるべきことを1つ1つ確実に実行していきたいと思いません。微力ではございますが全力で取り組んでいきたいと存じます。先生方のご指導ご鞭撻をお願い申し上げます。私の挨拶といたします。



## 副会長就任挨拶

福井県医師会副会長 広瀬 真紀

この度、6月20日に開かれました定例代議員会におきまして、福井県医師会副会長を拝命する事となりました。会員の先生方に、ご挨拶と御礼を申し上げます。

池端会長のもと、一期目の副会長を務められた腰地孝昭先生が奇しくも述べられておられた様に、私も外科出身で、あまりにも外科的で、失礼な言い方をしますと現会長、副会長の仲間入りをする者であります。私の出自は、一般外科、消化器外科、乳腺外科で、当時の私のボスであった故 田中猛夫先生（元福井赤十字病院長）に薫陶を賜り、乳がん検診、一般検診へと進みました。ある意味、外科医の宿命の道を歩んでいます。

私の中で医縫録とは、新しく就任された方々が自分の考え方や希望、気概、期待などを表現される機会だと理解しています。対して、私が書き始めたのは過去の自分の傲慢や驕りと、其れらに対するちょっぴりの反省と不満と不安です。

16年前には、当時始まった特定健診の是非を、福井市医師会検査センターの多くの先生方と夜中まで議論しました。12年前の新型インフルエンザ。ワクチン対策では当時の健康増進課長と激しいやりとりをしました。対策型がん検診に於いても同課長とバトルがありましたが、何とか温和なシステムを作り上げる事が出来ました。多くの方の賛同を得てA類、B類広域的予防接種は成立致しました。やるしかなかった胃内視鏡個別検診も、問題は残っていますが何とか稼動しています。

これら一部は、時間が経つにつれ、理想と現実の乖離を感じるようになり、本来の理想と違う事もまた理想的な事と思う様になって来ました。なりわいと相反する事も多くあったからです。

本年5月まで地区医師会の長を経験し、2年前からは日本医師会の小委員会に参加し、三層を同時に経験する事ができて、微妙な歪みも分かって参りました。立案部隊（日本医師会）、コーディネート部隊（県医師会）、実働部隊（地区医師会）の縦軸のズレを立案部隊にフィードバックする事も可能となり、この辺も私の仕事の範疇かなと思っています。

私の特殊な世界に戻ります。検診も健診も次の十年には大きく変わって来る事が予想されますし、そもそもこのコロナ禍の中、これらが今後どんな立ち位置に置かれていくのかを考える必要があります。一般の人々の行動変容を見極め、色々なレベルでアンケートを取り、対策を講じる必要があります。個別がん検診12年にあたり、手引書の改定も必要です。胃大腸検診はコロナ感染症に鑑み、洗浄機器導入が必須となりそうです。子宮頸がん検診はHPVを含めた、福井大学の取り組みも課題となるでしょう。乳がん検診は高濃度乳腺に対するモダリティ、エコーも考慮に入りつつあります。肺がん検診における低線量CT導入も、これからの問題ですが多分話題となる事でしょう。以上この世界の展望を主に書きましたが、副会長職を疎かには出来ません。公的医療保険などの厚生行政、医師の働き方改革などの労働行政といった、違う視野への挑戦も必要となりました。

以前、会員寄稿には、アメリカ全州ゴルフ場制覇の夢の再開を目論んでいると書きました。私の周りは「It's about a time.」なのですが、過去の仕事のHommageを求めて、まあもう少し歩こうかと思っています。案外フレイル防止に役立つかも知れません。最後になりましたが、会員の皆様には温かいご指導、ご鞭撻を心よりお願いし、就任の挨拶とさせていただきます。



## 副会長就任挨拶

福井県医師会副会長 大嶋 勇 成

この度、福井県医師会の副会長を拝命することになりましたので、紙面をお借りして、会員の皆様にご挨拶を申し上げます。

現職大学病院長であった腰地孝昭先生が県医師会の副会長になられたのは驚きでしたが、まさか、後任病院長の私も副会長に立候補させていただくことになるとは思いませんでした。これも、池端会長の福井県の医療構想と新型コロナ対策を念頭においたお考えと、腰地先生の医師会副会長としての実績の賜物によると理解しております。

副会長に立候補するにあたり福井大学上田孝典学長にご意見を伺ったところ、福井大学医学部附属病院長が副会長を務めることは、福井大学の地域貢献という点でも重要であり、附属病院と医師会との連携を強める上でもその機会があるなら副会長を引き受けたらどうかとの助言をいただきました。腰地前病院長に比べ、非力ではありますが、少しでも福井県の医療に貢献できればと思い副会長に立候補させていただきました。

これまで、福井県小児医療体制検討部会や周産期医療協議会、小児在宅医療推進協議会、アレルギー疾患医療連絡協議会などの県の会議では、もっぱら附属病院や関連病院の意見を反映させるべく活動させていただきましたが、今後は、医師会とより連携した形で参画できればと考えております。

新型コロナウイルス感染症では、変異ウイルスの流行による第4波も終息しつつあるかに見えましたが、感染予防意識の緩みからか再び患者数の増加が起きています。ワクチン接種の推進や、感染力は強いが弱毒化した変異ウイルスに流行が置き換わることで集団免疫が獲得されるまでは、流行を繰り返すと思われます。重症

化リスクが変化することに応じて、宿泊療養施設の利用法や入院管理基準、対応施設の役割分担の再考も今後必要になるでしょう。

地域医療構想での2025年問題はコロナ禍で生じた状況を考えると再検討が必要なのは明らかです。次の2040年問題は避けて通れないでしょうから、医療経済の観点以外に、新興感染症や災害対策などの危機管理対策的な要素を国がどの程度組み込むのか、今後の方向性に注視が必要です。統計数字のみに基づいた方針を地方が押し付けられることにならないよう、福井県の医療の実態をより反映したデータを用意することが必要になるでしょうし、第8次医療計画に向けてその準備が必要と考えています。

大学病院の教員は専門業務型裁量労働制を採用しています。診療も研究の一部とみなし、研究と診療、教育にかかわる一定の時間をみなし労働時間として扱うことで、労働時間を管理してきました。しかし、医師の働き方改革では、裁量労働制を採用した場合の時間外労働時間の上限は一般則の720時間に制限され、さらに、外勤先医療機関での勤務時間も労働時間として合算しなければならなくなりました。そのため、医師によっては外勤先での勤務、とくに当直などが、労働時間の関係で困難になることも想定されます。これは大学病院に所属する勤務医だけの問題にとどまらず、地域医療の一部を支えている非常勤医師の派遣をどうするかを再検討する必要があります。医師会の先生方とご相談させていただき解決策を探りたいと考えております。

最後に池端会長のご指導の下、微力ながら医師会活動を通して福井県の医療に貢献できればと考えております。今後とも会員の皆様のご指導、ご鞭撻をお願い申し上げます。